

アジアデザイン

新居浜上部地区太鼓台のデザイン考察を通して

ASIAN DESIGN

The design of drum Floats of Joubuchiku of Niihama as a case

.....
黄 國賓 大学院芸術工学研究科 助手 (文責)
松本 美保子 名誉教授
齊木 崇人 大学院芸術工学研究科 教授
今村 文彦 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
山之内 誠 デザイン学部環境・建築デザイン学科 準教授

KuoPin HUANG Graduate School of Arts and Design, Assistant
Mihoko MATSUMOTO Honorary Professor
Takahito SAIKI Graduate School of Arts and Design, Professor
Fumihiko IMAMURA Department of Visual Design, School of Design Professor
Makoto YAMANOUCI Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
.....

要旨

太鼓台とは、豊作の秋を感謝して氏神に奉納していたもので、多くの場合は瀬戸内海沿岸の港町、漁師町を中心に分布し、祭礼山車的一种である。重さ2、3トン、長さ12メートル、4～5メートルの高さをもつ。160人のかき夫が担ぎ差し上げる太鼓台は、仕込まれた太鼓を打ち鳴らし、大勢の人々が担ぎながら練り歩く。華麗な姿は、祭礼の中でとりわけ際だつ存在である。本報告は2009年10月15日～10月17日の間、西条・新居浜祭りの調査、情報収集に基づいて纏めたものである。特に新居浜の上部地区の船木地区、角野地区、泉川地区、中荻地区、四つ地区合計19台の太鼓台を対象としてとらえた(1)「太鼓台」の構造原理(2)「太鼓台」とデザイン(3)「太鼓台」と色彩など三つの視点から各地区の太鼓台と比較しながら、各太鼓台の基本的な構造、デザイン構成要素を明らかにすることを目的とする。

Summary

Drum Floats is the one which is dedicated to the god in appreciation for the autumn of the good harvest. In many cases, it could be found in the coasts and the fisherman towns of Setonaikai. It is a kind of festival float which is two and three tons in weight, 12 meters in length and 4 and 5 meters in height. Each drum float which is 4-5m in height carrying a drum and is carried by 160 persons while the drum is played and it is followed by crowds of people. Its splendid figure is conspicuous in the festival. This report is made based on the research which was held on 15th to 17th of October, 2009. The research was on Saijo and the Niihama festival. Especially Funaki area in the upper area in Niihama, Kakuno division, the Izumi Kawachi division, Nakaogi area. 19 drum floats in the above 4 areas were investigated. (1) Structure principle of "drum floats" (2) "drum floats" and its design (3) Drum floats and its colors. The research aims to investigate the fundamental structure of each drum floats and a design constituent factor by comparing with the drum floats of each area from the above three viewpoints.

1) 始めに

太鼓台とは、豊作の秋を感謝して氏神に奉納していたもので、祭礼山車的一种である。本報告は新居浜の上部地区（映像1：http://www.youtube.com/watch?v=eAgL_pJ9gV0）、合計19台の太鼓台を対象としてとらえた(1)「太鼓台」の構造原理(2)「太鼓台」とデザイン(3)「太鼓台」と色彩など三つの視点から各地区の太鼓台と比較しながら、各太鼓台の基本的な構造、デザイン構成要素を明らかにする目的とする（写真1）。



写真1) 左から右：上泉、下泉、松木板井、東田

2) 「太鼓台」の構造原理

- 新居浜の太鼓台の構造はいくつかの特徴があげられる
- 2-1 天幕：赤と白で表現するものが多い。それは太陽の輝きを示すものであり、天、宇宙を象徴するとされている。
 - 2-2 七重：当地は七重である。神が座られる座布団を表している。
 - 2-3 括り：七重の上の四隅に蝶結びにしたものを、俗に「くくり」と呼ぶ。雲を表現している。
 - 2-4 房：くくりの足の部分の先にあり、天の恵みの雨を表す。
 - 2-5 結び：上部地区19台の太鼓台は殆ど揚巻結びを採用しているが、菊結びを採用しているのは久保原、上泉、中筋の太鼓台しかない。
 - 2-6 布団縮：左側に口を開いた阿龍、右側に口を閉じた吡龍などの金糸の刺繍である。いずれも魔除けとしたもの。
 - 2-7 四本柱：七重を支えている下の枠の四本の柱のことで、四神（青龍〔東〕白虎〔西〕朱雀〔南〕玄武〔北〕）を表している。
 - 2-8 上幕、高欄幕：表現するモチーフは龍、虎、鷲などの禽獣幕、城郭、宮殿、お寺などの御殿幕、日本、中国の武者絵などの題材があげられる。
 - 2-9 高欄、台場：高欄の種類には擬宝珠高欄、組高欄があ

り、材料にはすべてけやきを使用している。

3) 太鼓台デザインの構成要素

19台の太鼓台にみる飾り幕の種類は植物紋、巴紋、文字紋、車紋があげられる。

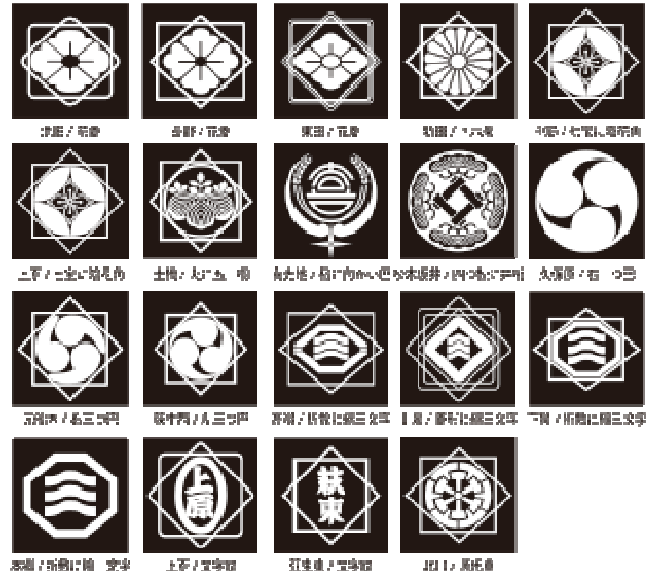


図1) 太鼓台の飾り幕

3-1 植物紋

植物紋の中には更に菱形の文様を四分してそれを四弁の花に見立てている花菱紋（池田、長野、東田）、日本の皇室紋章を象徴し、現在の神社にもよくみかける菊紋（新田）、金銀、瑠璃、瑪瑙などを象徴し、豊富を意味する七宝に陰花角紋（中筋）、瑞祥的な意味を持ち、秋の収穫に神前に供えて、神に感謝した丸喜字に稲に向かい巴紋（喜光地）、常緑、長寿、水などを意味する四つ松に井桁紋（松木板井）。また、豊臣秀吉が家臣に与えた西日本に多く見られた丸に五三桐の紋（土橋）などがあげられる。

3-2 巴紋

19台の太鼓台に巴紋が見られるのは久保原（右三つ巴）、元船木（右三つ巴）、荻生西（左三つ巴）である。巴は、文様紋の代表的なもの。日本では、巴の形が神紋、家紋、寺紋として尊重された。「三つ巴」は三つの勢力が互いに対抗している意味もあるとされる。また、巴紋が弓矢の神である八幡宮の神紋と見なされたため、宇佐八幡宮をはじめ日本全国各地の八幡宮で使われた。

3-3 文字紋

新居浜上部地区の太鼓台の飾り幕の紋の文字紋は主に折敷、菱形に三文字紋、また、文字自体のカタチで表現するものの二種類があげられる。

三文字紋：三文字紋は主に高祖、上泉、下泉、本郷四つの太鼓台に見られる。上泉の三文字が菱形に囲まれている以外、残った三つのところは全部が折敷の中にある。折敷とは四方に折り縁を付けた角盆・隅切盆。神饌を盛る器に神への畏敬を示すものである。一方、三の文字は古来、天の意味を象徴し、多産、数が多いという意も示す。太鼓台の飾り幕に折敷に縮三文字紋が飾られたのは、恐らく神の力に託して、豊作の願いが込められていたからであろう。

文字紋：文字そのままのカタチで使われているのは上原、荻生東がある。上原の場合は後に述べる札にある文字と同じ字体が使われ、統一感がある印象を与える。一方、荻生東の場合は荻東の両字で簡略され、札に書かれた字体とは異なっている。

3-4 源氏車紋

19 台の太鼓台の内、源氏車紋が使われるのは北口のみである。源氏車の文様が家紋として成立したのは鎌倉時代からである。円形源氏車のカタチは骨の数により六本源氏車、九本源氏車と区別する。北口の源氏車は六本源氏車に属するものである。現在の伊勢神宮の神官の使用家紋でもある。

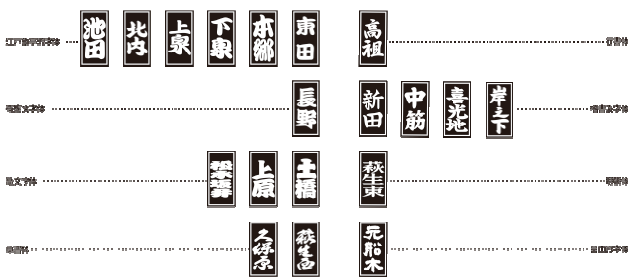


図 2) 太鼓台の札の字形

3-5 札の字形

太鼓台の所属を識別するため、真正面の布団締と上幕の間に札がある。札に刺繍された文字の字体は力が溢れ、それぞれの太鼓台の個性を表している（図 2）。19 台の太鼓台の札の文字から基本的に池田、北内、上泉、下泉、本郷、東田などの江戸勘亭流字体。長野の寄席文字体。

松木坂井、上原、土橋などの籠文字体、大久保、荻生西などの草書体、高祖の行書体。新田、中筋、喜光地、岸之下などの楷書系字形。荻生東のような明朝体、元船木のような自由形字体などに分類することができる。

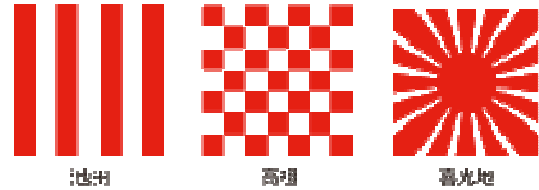


図 3) 太鼓台の天幕種類（縞式、グリッド式、太陽式）

4) 天幕のカタチ（図 3）

4-1 縞式

色付けの縦縞に白縞が交じることが特徴である。池田、久保原、北内、松木坂井、上原、本郷の太鼓台の天幕はすべてが縞式に属する。その中の久保原の天幕はほかの縞式天幕と異なって、赤、紫並び合う縦縞の間に白縞が挟まれ、久保原太鼓台の天幕の特徴を強調している。

4-2 グリッド式

グリッド式の天幕の特徴は基本的に色が付いた正方形のパターンと白の正方形のパターンとが交じり合うことによって構成される文様である。特に赤と白とを組み合わせるパターンが多く見られる。そのような形態で採用しているのは高祖、長野、新田、中筋、岸之下、土橋、東田などの太鼓台の天幕があげられる。一方、元船木は赤と白のパターンの中に緑のパターンが混入し、下泉の場合は紺碧のパターンを、荻生東は薄藍を、荻生西は本紫が使われているのは更に自らの特色を強調している。

4-3 太陽式

太陽式は文字通り太陽紋で表現するものであり、天幕本来の意味を直接的に表している。19 台の太鼓台の中に、そのような式を採用しているのは喜光地、上泉のみである。二つの太陽紋の構造はかなり似ているが、上泉の場合は太陽の放射線の周辺に更に紫の線が施され、喜光地の天幕と区別することができる。

5) 「太鼓台」と色彩

太鼓台の色彩の構成に、担ぎ歩く人が着る法被を始め、

括り、房、布団締、上幕、高欄幕などには、華麗な色彩で覆われ、各地区の太鼓台の特徴が表われる一方、新居浜祭りの色彩イメージを構成する役割を果たしている。

5-1 トーンからみた太鼓台の色彩の構成原理

太鼓台の色彩イメージを考察することに当たって、本報告はトーン概念を用いて、説明する。トーンとは色彩の明度と彩度を融合した概念で、明暗、濃淡、派手・地味というように、色相が違ってても、どの色相にも共通した色の状態（調子）がある。この色の調子をトーン (Tone) と呼ぶ。

トーンの記号化は下の如く。

V/するどい。S/つよい。B/明るい。P/あわい。Vp/ごくあわい。Lgr/あわくよわい。L/よわい。Gr/しぶい。Dl/にぶい。Dp/こい。Dk/くらい。Dgr/ごくくらい

5-2 法被 (図4)

トーン図でみた法被は派手なV、S色とDk、Dgr 暗い色二つの色彩が主に使われるほか、少数明るい色のVp、地味色のGr、Dl も使われている。見る人に開放的、元気な、陽気な、愉快的、活気なイメージを与える。

5-3 天幕 (図4)

天幕の色は基本的に明るいVp、B色と派手なV、S色が使われ、見る人にははっきりした、さわやか、新鮮な、楽しい、躍動的なというような生き生きとしたイメージを与える。

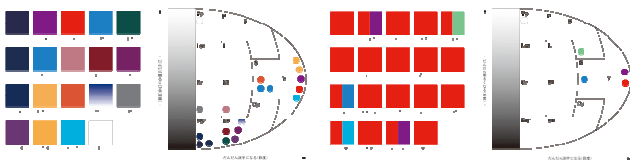


図4) トーン図にみた法被と天幕の色構成

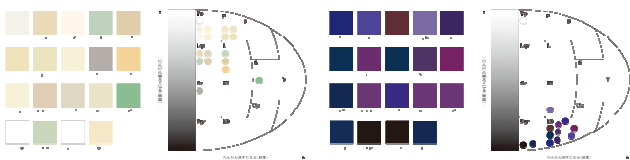


図5) トーン図にみた房と旗の色構成

5-4 房 (図5)

主に明るいVp、Pの色、地味なLgr、L色に使われた房の色は純真、清楚な、さわやかなイメージが連想されるほか、心を鎮める、静寂なイメージが感じられる。

5-5 旗 (図5)

旗の色はDgr、Dk、Dpなどの暗青色が使われているが、心理的には濁りみが感じられる。

5-6 括り (図6)

すべての括りの色はDgrの色であるが、気高い、神聖、荘厳、厳粛なイメージが連想させる。

5-7 上幕、高欄幕 (図6)

上幕、高欄幕の色は太鼓台全体の3分の2に占め、黄金の刺繍に覆われているため、太鼓台の基本的な色調を構築する。その色は大体トーンのS、Bのところ当たる。陽気、豪華、まぶしいイメージが連想される。

図4-6に表記する色彩は新居浜上部地区19台の太鼓台の独特な色彩構成であり、ある意味では、それらの色彩も当地区の祭りの色イメージでもありと考えられよう。

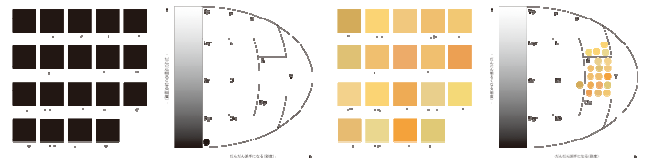


図6) トーン図にみた括りと上幕、高欄幕の色構成

6) 結び

日本の太鼓台の分布は新居浜をはじめ、瀬戸内海の広い範囲に分布している。瀬戸内海の各地域の太鼓台の形成背景、それぞれの太鼓台の特色、各地域の祭りの色彩イメージはどのように位置づけられるか、今後は本研究の中に提起した新居浜上部地区の太鼓台にみた「太鼓台」の構造原理、「太鼓台」とデザイン、「太鼓台」と色彩など三つの考察視点を更に深め、瀬戸内海の各地域の太鼓台の特色を比較し、考察していきたいと考える。

(2009年度大学院共同研究採択課題) 文責/黄國賓

参考文献

- 1) 泡坂妻夫戸、『家紋の話-上絵師が語る紋章の美-』、新潮選書、1998
- 2) 小林重順、『カラーシステム』、日本カラーデザイン研究所、講談社、1999
- 3) 濱田信義編、『日本の紋章』、PIE BOOK、2007